ドイツ批判心理学の可能性Ⅱ

クラウス・ホルツカンプによる主体科学としての学習理論

企画：日本心理学会 批判心理学研究会
司会者：いとうたけひこ（和光大学）
企画趣旨の説明：五十嵐靖博（山野美容芸術短期大学）
話題提供者：百合草禎二（富士常葉大学）
指定討論者：白井利明（大阪教育大学）
指定討論者：岩男征樹（東京工業大学）
指定討論者：加藤弘通（静岡大学）

［企画主旨］

1990 年代に国際的な運動となり，21 世紀の心理学の新動向として注目を集める批判心理学の主な起源のひとつは、1970 年代にベルリン自由大学心理学研究所での改革運動の結果から生まれたドイツ批判心理学である。従来の研究の非歴史的・非社会的・Cartesianism 的研究姿勢に対する反省から生まれた。昨年度の企画を受け本ラウンドテーブルでは、クラウス・ホルツカンプによる主体科学としての学習理論が誕生した背景と成果、日本の心理学や発達心理学にとっての意義を検討する。

［話題提供の要旨］

「クラウス・ホルツカンプによる主体科学としての学習理論」百合草禎二（富士常葉大学）

「正統的周辺参加の概念を探求し発展させようという考えは、1988 年に二人がカリフォルニア州パロアルトの学習研究所で勤めていたという文脈以外では生まれえなかっただろう。とくに、そこで進行していた、**活動理論**、**批判心理学**、**仕事場での学習**についての読書グループはアイデアと討論のすばらしい源泉であった」。この引用は、言うまでもなく、ジン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習』の一節である。ここで「活動理論」や「批判心理学」が挙げられているが、当時、果たしてどれだけの人がこの理論にピント来たのであろうか？恐らくいなかったであろう。

クラウス・ホルツカンプ（Klaus Holzkamp 1927－1996）は、すでに何回かに亘るシンポの中で紹介・検討をしてきた。ベルリン自由大学を拠点とした「批判心理学」の創始者である。「批判心理学」は、文化歴史学派とそこから派生した活動理論の影響のもと、独自な心理学理論を構築した。ホルツカンプは、1972 年に『批判心理学―準備労作』を著し、主に『社会心理学雑誌』（Z.Sozialpsycholgie）に発表した論文の再考を行い、あるべき「批判心理学」の方向性を明らかにした。1973 年にレオンチェフ（活動理論・文化歴史学派）の『精神の発達理論』のドイツ語翻訳を通して、レオンチェフの「機能–歴史的方法」を援用して、『感性的認識–知覚の歴史的源泉と社会的機能』を著した。心理的なものの発生が、歴史的に如何に発生するのかを五つのステップ（「萌芽形態」→「危機の発生」→「機能の転換」→「ドミナント転換」→「再構造化」）から明らかにした。

ホルツカンプは、心理発生における社会の役割、その中での生活活動 Lebenstätigkeit（「生活遂行」Lebensführung）を常に重視した。しかし社会が機械的に人間心理へと影響を与えると考えない。人間が、その影響を与える社会それ自体の変革へと働きかける主体だからである。従来の研究の欠落した視点である。ここに「発展的労働研究」（ユーリョ・エンゲストローム）というアプローチを取る根拠がある。恐らく、こうした観点を主張するために、ホルツカンプは、社会と人間との連関を媒介するものとして、単なる「活動」でなく、「行為能力」（Handlungsfähigkeit）という概念を基本概念に据え、それをベースに心理学の再構築を図った。1983 年には『心理学の基礎づけ』を上梓した。

さらに 1993 年に大著『学習―主体科学的基礎づけ』を出版した。ホルツカンプは、1980 年代から「主体性」の問題を前面に押し出して議論するようになった。1979 年に「早期児童期における主体性の発生」をプロジェクトで取組み、その後、現象学の観点の検討を経て、「批判心理学」から「主体科学（Subjektwissenschaf）」への転換を志向した。今回は、こうした研究の傾向の発展史を含めて、ホルツカンプの「主体科学の立場からみた学習理論」を紹介・検討する。